

研究論文

音と音の狭間で

—幼児音楽教育や保育者養成におけるリズム学習の教育的意義—

平 松 昌 子

From Sound to Music

—The Position of Rhythms in Musical Education for the Early Child—

HIRAMATSU Shoko

はじめに

幼児が何かに反応して手を叩き、親と一緒に声を発しながらリズム打ちをして遊んでいる姿を見かけることがある。乳児や幼児ばかりでなく大人までが、リズムを頼りに音楽を楽しんでいる。リズムが音とともに、身近なところに存在している場合はなおさら、そのリズムが、幼児に大切な表現の手段を提供している。その一方、保育者が準備している音楽的な環境の設定によっては、幼児とリズムの関わり方が随分と異なり、それが有益な育成に繋がるときと、そうでない場合がある。そこで、音楽リズムが活用できる幼児教育・保育の位置づけについて洞察し、項目別に検討を行い、分析してみたい。

1. リズム（律動）は音楽の主要な構成要素のひとつ

音楽を理解するために、音楽の専門用語が以前から使用されており、現在に至るまで次のような役目を果たしてきている。一方ではこのような用語が音楽に潜んでいる状況を知らせるため、理解の道筋を提供するために使われていた。他方でこの用語が、音楽や音楽演奏の質を評価する手段にもなっていた。「リズム」という概念がこのように、音楽の根本的な要素の一つを示す語彙として古くから使用されてきた^{注1}。

ところで、この「リズム」の概念の意味に対して、納得できる定義が出来上がるまでに随分と時間が費やされてきた。現代の研究者間では、リズムの語彙について、複数の定義が提示されている。その主なものを以下に挙げてみる。

- 1) 音楽が進行している中で、強弱の音が交互に並ぶように配列したもの、すなわち規則的又は不規則的の間隔で例えば、二、三、四、それ以上小節間で、ある音が（それは次の音を聞く期待をよび起すのだが）休止音や、多少とも完全終始や区切りの効果を聴覚に与えるもの。
- 2) リズムとは、音楽像（musical picture）の動きによって生み出されるものであり、異なる時価の組み合わせの中でできるものである。
- 3) 音楽のリズムは、音楽の拍(beat)すなわち時間的要素である。

以上の三つの定義^{注2}は、音楽リズムの特徴を僅か異なる視点で捉えている。しかしながら、これらすべての定義の前提として、リズムが音楽の主要な構成要素のひとつとして考えられている。

これから、音楽教育の学習目標を念頭に置きながら、音楽学習上の「リズム」の役割について分析してみたい。

2. 音楽学習上のリズム

音楽学習や音楽評価では「リズム」の概念は不可欠なものであると言っても過言ではない。そこで先ず、音楽学習の状態を簡単に想像してみよう。既に完成した音楽奏があり、それを模倣し、模倣だけをもって音楽学習を進めることは可能であろう。つまり理想の学習者が存在し、曲を聴き、それだけでその曲の総てを理解し、その音楽を完全に掌握している僅かの例がある。しかし実際の世界において、このような事例は奇跡に等しい。私たちの通常の社会では、大衆と音楽関係者がこの種の奇跡に頼る訳にはいかない。だから、現代の私たちの社会では、音楽教育が存在し、さまざまな形態で音楽を学習する者に役立っている。そして音楽教育や音

楽学習を効率良く進めるためには、リズムについての学習や教育までが必要になってくる。総括していえば、奇跡に期待するよりも、音楽学習と音楽教育を実施することが現代社会の選択肢である。これと同様であるが、リズムについての理解が、自然に身につくと考えるよりも、リズム教育を音楽教育に取り込むことの方が効率的である。これらを通じて、音楽学習や音楽教育の中のリズム学習とリズム教育の究極的な役目が明らかになってくる。

3. 音楽用語、音楽教育用語の「リズム」は、音楽専門用語の最も古い概念のひとつ

リズムといわれる現象は、あらゆる音楽において、根本的な要素の一つを成している。それに伴ない、私たちが今日に至るまで使用し続けてきた音楽専門用語の内、「リズム」の概念は、最も古いものの中でも代表的である。古代末期のCassiodorus (490~585) の「De Musica」によれば、それより以前の古代ギリシャでは、音楽の「リズム学」(リトミッケ)が存在していた。当時、音楽の拍子と音価についての指導を担当していたのは、「リトミッコイ」と言われた先生たちであった。Ciceroも同様に伝えている^{注3}。それ以外に、「リズム」の概念が広く、プラトン、アリストテレス、デモクリトスなどの古代著者の文中に登場しているのは言うまでもない。とりわけ、既に古代の段階において、音楽観がシステム化され、リズムに基づいて音楽が作曲され、演奏されなければならなかった。古代中国や日本でもこれと同様な傾向がみられた。とりわけリズムという概念と類似した意味をもつ「律動」がこの事を証明している。従って、歴史の視点からみて、音楽の発展がこの段階に進むと、音楽教育、リズム教育とそれに応じた音楽評価が必要になってくる。これらのひとつの結果として、リズムの語彙が音楽用語、音楽評

価、音楽教育のなかで、代表的な概念として古代から現代に至るまで使用され続けてきた。今日の芸術性の高い音楽であっても、それをリズムの観点から学習、分析し、詳細まで理解させることが教育の課題となっている。

4. 幼児音楽教育上のリズム教育の役割

音楽教育やその中のリズム教育に意義があると認めれば幼児教育において、リズム関連の幼児音楽教育を、とても重要性の高いものとして位置づけなければならない。それは、幼児の音楽教育が、本人の後のあらゆる音楽学習の土台になるからである。尚、この幼児音楽教育には、リズムについての正しい理解と把握が求められる。つまり、リズムの音楽要素が重要なものであるため、リズム学習を欠かさずに幼児の音楽教育学習の中で推進することが望ましい。逆説的に言えば、幼児の早い発達段階でリズムの間違った把握が定着してしまえば、その歪みは今後、学習者の総ての音楽観に影響を及ぼすことに繋がる。

ところで、将来、幼児の音楽教育を指導する保育者を想像し、その保育者を養成する過程を思い描くと、リズム関連のこれらの問題が、一段と重要性を増してくる。つまり、十分にリズムの要素について把握しない保育者から、その歪んだリズム感、音楽観が知らず識らずの内に、幼児自身の音楽観になってしまうからである。

5. 音楽史上のリズム

リズムの概念は、音楽教育や音楽評価のために、古代から現代に至るまで使用続けられてきた音楽用語である。この事実だけからも、音楽学習、音楽教育上、リズムの役割の重要性を推測できる。広い視野を持って、人類の文化史、音楽史をみれば、これに合致したイメージが浮

かんてくる。ということは、音楽史全般を振り返ると、原始的な時代では、先に、リズムの強い音楽が登場し、後になって、より複雑で高度な音楽形態へと発展してきたことが音楽を知っている者の通常の見方である^{注4}。その一方、リズム（律動）の根本的な音楽要素が、あらゆる高度な音楽の中でも重要な役目を果たし続けていることについて前述した。作曲家や音楽会の演奏者には、リズムについての理解が求められているのは当然のことである。それに加えて、プロフェッショナルとして音楽評論に携わる人もまた、リズムの要素に注目しなければならない。

歴史の中の音楽の歩みを再現しながら幼児が表現する音楽は、まず原始的な時代の音楽を反映し、太鼓などの楽器奏から始まり、次第に幅のある音楽の理解へと向かっていく。幼児のこのような音楽学習において、リズム学習が重要な要素になるのは言うまでも無い。従って、幼児の学習を理解し、幼児と共に活動できる保育者は、この音楽リズムの学習を重視して、有意義なものに置き換えて、教育上のその可能性を意識しなければならないのである。

6. 教育論からみた幼児の音楽教育とリズム

1990年迄、幼児の音楽学習、音楽教育とリズムの深い関わりを強く反映していたのは、当時の文部省の「幼児教育要領」^{注5}であった。ということは、そのときの幼児教育要領において、幼児の音楽系の教育の総ては「音楽リズム」という概念で、位置づけられていた。言い換えれば「音楽リズム」という概念によって、幼児の音楽教育、音楽学習がリズムを中心に纏められていたと言っても過言ではない。

理論の観点からみて、当時の「音楽リズム」という語彙は、カール・オルフが提唱していた音楽論の見方と、よく一致していたと言え

る^{注6}。つまり、カール・オルフが、早くも子どもの視点を重視しながらリズムを中心にした子どもの音楽導入教育を模索していた。これらの流れのひとつの結果として、リズム関連の数々の手法と概念（身体表現、リトミックス、ユーリズム、メトリック、ボディパーカッション^{注7}）が日本の幼児音楽教育の世界に取り入れられてきた。

ところで、1990年以降の「幼児教育要領」^{注8}において、幼児の音楽系の学習領域の中の「音楽リズム」の名称（内容）は「表現」に改められ、現在に至っている。つまり幼稚園や保育所での音楽教育は「表現」という新しい概念により、従来の図画工作と統合されることになった。そこで、幼児音楽教育のこの新しい条件下で、音楽リズム教育の重要性が減少したと思う者がいるかもしれない。しかし、それは間違えである。尚、カール・オルフが、推奨したものと異なる方向性が現れたとの解釈も正しくない。

詳細に観察していけば、以前の「音楽リズム」と現在の「表現」という概念の両方は、カール・オルフが提唱していた理論に合致している。単に、それぞれの概念が、オルフ理論中の別の側面に焦点を当てている。なぜなら、オルフが一方で、リズム中心の子どもの音楽教育を推し進めていた。しかしその反面、彼が幼児のための音楽教育は、複合的な要素を含まなければならないことを強調し続けていた^{注9}。以前の研究の中で筆者は、オルフの進めた音楽教育や音楽学習のこの複合的な特徴を重視し、それを表すため、「ハイブリットな幼児音楽教育」の概念を考案した^{注10,11}。つまり、古典的な音楽学習、音楽教育と異なり、オルフが提唱していたものは「ハイブリットな」性質をもつ音楽教育であったといえる。この観点からみて、以前の「音楽リズム」という語彙と「表現」の新しい概念の両方を通じて、オルフ的ともいえる「ハイブリットな」方向性が示されている。この背景を意識

すれば、「表現」の条件下の幼児音楽教育においてもリズムの要素が相変わらず大切にされていると推測できる。

7. 新しい発想のリズム

第二次世界大戦後の幼児教育において、リズムについてのこのようなオルフ的と言える考え方が基軸となったことは、歴史的にみて、何を意味しているのだろうか。ギリシャの古代から19世紀に至るまで、さまざまな音楽学習や音楽教育が誕生し、リズムの概念を使用していた。その反面、ベートーヴェンの時代迄、殆どの音楽教育は、個人から個人への技能伝達に支えられていた。やっと19世紀後半になり、義務教育が普及し、義務教育の一環として、音楽教育が大衆に向けられた。さらに遅れて、幼稚園や保育所が教育制度の中で認められるようになった。総括していえば、教育、幼児教育や音楽教育の大衆化が、それを担当する種々の組織、行政などを必要とし、その結果として、学校や幼稚園などが現代社会の不可欠な設備となった。音楽教育のこの大衆化を通じて、音楽専門用語までが、大衆文化の中に定着し始めた。推測ではあるが、この音楽用語のかつて無い大衆化において、最も頻繁に使用され始めていたものは、恐らく「リズム」という概念であった。

幼児教育の大衆化が、義務教育よりも遅れて浸透したこともあり、結局、幼児教育、幼児音楽教育に強い影響を及ぼしたのは、第二次大戦直後の音楽文化であった。これらのことは幼児音楽教育上、今日まで使用されている「リズム」の概念をみて明らかである。音楽や音楽教育の大衆化が進む中、とりわけ戦後の世界では、リズムを強調した音楽が好まれ、音楽論や音楽教育論でもリズムの現象が一層重視される傾向が一般的であった。早くも有名なヒンデミットが、作曲活動の傍ら音楽リズムの要素を重要視した

研究を発表し^{注12}、多くの音楽関係者がその影響を受けた。その次の世代から新しい状況に対応できるよう、オルフやダルクロウズの音楽論、音楽教育論^{注13}では、幼児の段階から学習する音楽リズム教育が重視され、大切な役目を果たし始める。この新しい音楽教育が、古典的な教育を超えて、発達心理学や高度な学習論を念頭におきながら構築されてきた。この潮流の中で、それぞれの「幼稚園教育要領」が終戦後から今日に至るまで、日本の幼児音楽教育を方向付けてきた。

8. 音楽リズムを重視した教育の課題と可能性

音楽リズムの古くて新しい用語が、学習、教育、幼児教育に組み込まれ、そこで音楽教育の手法、手段、方法と評価基準になった。それに伴い、リズムを重視した音楽教育によって、嘗て無かった可能性までが拓かれてきた。ここでは音楽リズムを中心の幼児音楽教育やその関連の保育者養成の状況を踏まえて、それらの教育上の可能性と課題について取り上げたい。

- (1) 音・音程やリズムについての把握は、幼児教育、幼児音楽教育の総てに関係し、担当者が無視できない課題を提供している。
- (2) 保育者による音楽的な環境の設定を考えば、そこにはリズムが有用なファクターになり得る。適切な音楽環境の設定やそうでない場合に、幼児音楽教育の成果が大きく異なる。
- (3) とりわけ、幼児教育の中でリズムを使うことにより、音やメロディが生まれることから、幼児の興味と感性を高めることができるので大切である。
- (4) 幼児の教育において不可欠な遊びの部分を、リズム教育の導入で活かし、複数の遊びと多様な音楽学習とを有益に結びつけることができる。

- (5) 音楽外の学習と音楽学習を兼ねることが可能になる。幼児音楽教育に求められる「ハイブリット化」が実現される。
- (6) Aの遊びからBの遊び等への移行を計画するのは保育者だが、リズム学習の選択肢を知らない保育者は、その役目を十分に果たせない。
- (7) リズム学習を用いて、幼児音楽学習を複数の方面から推進する可能性がある。それにより、多元的な学習モデルが形成される。
- (8) 音の理解とリズムの把握が幼児音楽学習の基本になる。しかし、音についての理解が未発達な段階では、リズム学習に頼って、多様な音の学習へ進むことが可能になる。そこから音程の学習やメロディ学習への新たな道が拓かれる。
- (9) リズム打ちパターンを用いて、それを身体表現化し、ある音の性質（長短等）をさまざまな仕組みの中で意識させることが有益である。
- (10) 音楽を作り上げる過程から出発し、音について学び、音についての分析力が育成される。
- (11) リズムパターンを学習することにより、読譜、記譜との接点を意識させることができる。
- (12) 学習評価の場合にも、単純すぎる評価法を避けて、幼児の状態に一層忠実な複合的な評価法を適応することができる。
- (13) 幼児の発達段階に応じて、音とリズムに対しての異なる学習が望ましい。しかし、リズムを意識しない教授法は、この範囲で機能を発揮できない。
- (14) 音、言葉、リズムは、幼児と外界との関係において重要な役目を果たしている。幼児の音楽教育と学習の領域では指導者がこれらの事実を無視できない。そこにはオ

ルフの目指していた音楽教育の目標がある。

(15) 幼児の学習の条件に一層相応しい音楽教育を目指して、オルフ自身が学校を設立したことがよく知られている。その影響下で手作り楽器、ボディパーカッションなどが、日本の幼児音楽教育に取り入れられた。音楽リズム教育の面でも、それに応じた取り組みが相変わらず求められている。

(16) 保育者養成の課程の中でもこれらの条件に応じた対応が望ましい。ということは種々の予備学習を通じて将来の保育者に、音楽リズム教育の課題と可能性について、適切なイメージを伝達することが重要である。

結びにかえて

リズムは音楽の主要な構成要素であり、リズムの語彙は、音楽学習や音楽評価に使用された最も古い概念の一つである。とりわけ、幼児を対象にした音楽教育を思考するにあたり、リズムの概念やこれに繋がる教授法が大きなウエイトを占めている。つまり、高度な音楽学習では、リズムの現象が見え隠れはしているが、幼児が初期から音楽に出会う過程の場合、リズム学習とリズムを重視した教授法が求められている。幼児教育の指導者は、幼児のこの諸条件に対して敏感にならなければならない。大人向け音楽教育の場合よりも、幼児の音楽教育ではリズムに基づく取り組みが大切である。従って、幼児音楽教育の指導者がこれらの種々の条件や数々の選択肢を意識しながら、的確に対応していかねばならないのである。

注

注1 ザックス、クルト著 皆川達夫外訳
「音楽の起源」音楽乃友社 1969

注2 クレストン、ポール著 中川弘一訳「リズムの原理」音楽乃友社 1968 p.2~3
この三つの定義は(1) Matthis Lussy, 音楽の表現“(Musical Expression)”、(2) Percy Goetschius, 作曲の素材“(Materials of Composition)”、(3) Sidney A. Reeve, 音楽の純理論“(The Rational Theory of Music)”によるものとして紹介されているが、残念ながら「リズムの原理」の翻訳書には、文献や年代などについてが記載されていない。

注3 Georges, K. E. : Lateinisches Wörterbuch (ラテン語辞典), Basel 1967, vol.2 p.2390.
多くの著者が「リズムの概念は一般的な意味の語彙から音楽用語に変身した」と指摘している。しかし、リズムの専門用語としての古くからの利用をみれば、この解釈は、実際の音楽史をあまりにも軽く捉えている。

注4 Hastings, James. (ed.) : Encyclopedia of Religion and Ethics, New York, 1911 vol.5 p.91. これと同様な解釈が早くも現代より1世紀前の辞典で表現されていたことが注目に値する。

注5 文部省「幼稚園教育要領」フレーベル館 1959

注6 三輪 宣彦著 「オルフ音楽教育の今日的意義」全国大学音楽教育学会紀要第9号 1998

注7 大山 美和子著 「子どもの身体表現」東芝EMI、2002、ボディパーカッションという身体表現方法は、現在では当たりまえのように使用されている。例えば、音楽リズムに合わせて手・足拍子打ち、工夫をして体のそれぞれの部位を叩いて音を出したり、掛け声を出すなどして表現する。

注8 文部省「幼稚園教育要領」大蔵省印刷

局 1990

- 注9 星野圭朗著 「オルフ・シュールベルク (Orff Schulwerk) : 理論と実際」 全音楽譜出版社 1989
- 注10 平松 昌子著 「幼児教育をハイブリットな教育として捉えて」 北海道文教短期大学研究紀要第28号 2005
- 注11 平松 昌子著 「学生の音楽観と幼児音楽に向かう姿勢：ハイブリットな音楽教育を考える」 北海道文教短期大学研究紀要第31号、2007
- 注12 ヒンデミット、パウル著、坂本良隆外訳 「音楽家の基礎練習」 音楽乃友社 1968
- 注13 ダルクローズ、ジャック.E.著、板野 平訳 「リトミック・芸術と教育」 全音楽譜出版社 1968

参考文献

- 松本 俊郎著 「カール・オルフの音楽教育からみた新教育要領」 長崎県立短期大学研究紀要第29号 1981
- Orff, Carl 属 啓成訳 「子どもはリズムに生きる」 NHK編 1966
- 駒 久美子著 「保育者養成における音楽的な自己表現と構造的聴き取りの重要性」 全国大学音楽教育学会紀要第18号 2007
- 河野 重雄編著 「新しい幼稚園教育要領とその展開」 チャイルド社 1989
- 佐野 清彦著 「音の文化誌」 東西比較文化考 雄山閣 2006

(2008年1月21日受稿)

Abstract

Rythm, alongside with sound, constitutes an integral element of music. Indeed, under fortunate conditions, music learning sometimes advances without educational support. But this observation cannot deny the importance of musical instruction or the potential of education promoting musical rythm awareness. Even more than in instruction for elder children, rythm-based musical education deserves an essential share in early childhood musical education. Accordingly, nursery school teachers training should sensibilize students towards these conditions and possibilities when introducing small children to the world of music.